

書評 辻学著『ヤコブの手紙』新教出版社，2002年

| | |
|-----|---|
| 著者 | 原口 尚彰 |
| 雑誌名 | 東北学院大学論集．教会と神学 |
| 号 | 36 |
| ページ | 155-165 |
| 発行年 | 2003-03-25 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1204/00024311/ |

「書評：辻学著『ヤコブの手紙』新教出版社，2002 年」

“Book Review: Manabu Tsuji, The Epistle of James
(Tokyo: Shinkyō Shuppan, 2002)”

原 口 尚 彰

Takaaki Haraguchi

2002 年には、山内眞著『ガラテヤ人への手紙』日本キリスト教団出版局と、辻学著『ヤコブの手紙』新教出版社という二つの本格的な新約聖書関係の注解書が出版された。山内氏のガラテヤ書注解について言えば、評者は日本新約学会の依頼によって、2003 年 5 月発行予定の『新約学研究』第 31 号に書評を書くことになっているので、今回は、辻氏のヤコブ書注解の論評を行ってみたい。辻氏のこの著作については、既に佐藤研氏が、『福音と世界』2002 年 10 月号 68-71 頁に書評を書いているし、小河陽氏がこれから『新約学研究』第 31 号に書評を書くことになっている。佐藤氏は、Q 資料の研究者として知られている研究者であるが、かつてヤコブ書の注解を『聖書と教会』に連載したことがあるし(1987 年 10 月号から 1988 年 9 月号)、ヤコブ書についての論文も数本書いており、ヤコブ書の研究者でもある。小河氏は、編集史的立場に立ったマタイの研究者であるが、荒井猷・大貫隆両氏によって提唱された文学社会学という方法論の批判者としても知られている人物である。これに対して、私はかつてマタイ研究から出発し、最近

は、パウロ研究と使徒言行録の修辞学的研究に力を集中している研究者である。つまり、私は佐藤氏や小河氏と全く異なった方法論的前提と問題意識に立つ者であるので、辻氏のこの注解書に対しても当然のこと、全く違った角度から光を当てて検証することになる。読者諸氏に対して、辻氏の原著と共に、三つの書評を読み比べることを勧める次第である。

辻氏はまだ三〇代後半の若い世代の新約学者であるが、研究生生活の初期から一貫してヤコブ書を研究して来ており、彼のヤコブ書研究の歴史は既に一五年に達している。辻氏のヤコブ書研究の山は、スイスのベルン大学神学部に提出して受け入れられた博士論文、*Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung. Eine Untersuchung zur literarischen Gestalt und zur inhaltlichen Kohärenz des Jakobusbriefes* (WUNT II,9; Tübingen: Mohr, 1997) である。他方、辻氏は学位論文の執筆の時に蓄積した知識を基礎に、『福音と世界』1999年1月号から2000年1月号にわたり、ヤコブ書の注解を連載しているし、2000年に日本キリスト教団出版局から出た『新共同訳新約聖書略解』のヤコブ書の項も担当している。今回の注解書は、辻氏のヤコブ書研究の集大成とも言うべき性格を持っている。

辻氏の今回のヤコブ書注解は、新教出版社から、刊行されている『現代新約聖書注解全書』の一環として刊行された。『現代新約聖書注解全書』は、1960年代の後半より刊行が始まったが、田川建三氏の『マルコ福音書 上巻』、荒井献氏の『使徒行伝 上巻』、佐竹明氏の『ガラテヤ人への手紙』、『ピリピ人への手紙』、『黙示録 上下巻』しか刊行されていない、未完成の新約聖書注解全集である。田川、荒井、佐竹

といった一時代前の大家たちから、一気に世代が飛んで若手研究者の筆になる注解書が出現したことは記憶されて良いことである。評者は本書の持つこのような意義を十分認めながら、学問的な検証作業を行うものである。

本書は、ヤコブの受容史、文学類型、著者と受取人、構成、思想的特徴、言語と文体、成立事情を論じた序論部分と(1-46 頁)、個々の箇所の釈義を行う本論部分(47-272 頁)、参考文献表(273-291 頁)から構成されている。著者は、「神と主イエス・キリストの僕ヤコブより、離散している 12 部族へ挨拶を送る」という、発信人ヤコブの名と受信人と挨拶の定型句を記した、書簡的書き出しの句(ヤコ 1: 1)の存在を主たる根拠に、ヤコブ書が手紙であると判断する(5-13 頁)。但し、著者によれば、「神と主イエス・キリストの僕ヤコブ」とは、初代教会の最高指導者の一人であった主の兄弟ヤコブ(ガラ 2: 9; 15: 13-21)を指しているが、実際にヤコブがこの書簡を執筆したのではなく、本書簡はヤコブの権威を援用して、全キリスト者に宛てた書簡の形式を採った偽書であり(13-26 頁)、1 世紀後半の早い段階(紀元 70-80 年頃)に書かれたと推定される(45-46 頁)。この書簡の本当の著者は、流暢なギリシア語を駆使するディアスポラのユダヤ人信徒であり、教会で教師の役割を担っていたものである(26 頁)。

本書は、ヤコブ書が、相互に関連のないバラバラの勧告をまとめたパレネーゼであるという M・ディベリウスの学説を批判し、この文書が手紙であることを強調する(5-13 頁)。著者は、I. Taatz の研究(*Frühjüdische Briefe*. Göttingen: V & R, 1991)に触発され、初期ユダヤ教には、エルサレムの権威者からディアスポラのユダヤ人達に

宛てた回状の形式を採る「ディアスポラ書簡」の伝統があり (II マカ 1: 1-9; 1: 10-2: 18; エレミヤの手紙, シリ・バル 78-86 章), 初期キリスト教の一部の書簡に影響を与えていると考える (使 15: 23-29; I ペトロ書, ヤコブ書)。「神と主イエス・キリストの僕ヤコブより, 離散している 12 部族へ挨拶を送る」ヤコブ書は (ヤコ 1: 1), 著者によれば, 「キリスト教ディアスポラ書簡」なのである (22-23 頁)。ここでの問題は, 著者がヤコブ書の書簡性を強調していながら, J. White のパピルス文書中に含まれる書簡の実証的研究以外には, 古代書簡論についての基本的文献に言及しないことである。古代書簡論については, この他に沢山の一次文献があるし, 古代書簡論と新約書簡の関係については評者を含め多くの聖書学者達が論じてきている。例えば, A. J. Malherbe, *Ancient Epistolary Theorists* (SBL Sources for Biblical Study 19; Atlanta: Scholars, 1987) は, 古代書簡理論に関する一次資料を集めた便利な資料集である。D. E. Aune, *The New Testament in its Literary Environment* (Philadelphia: Westminster, 1987) 158-225; D. Dormeyer, *Das Neue Testament im Rahmen der antiken Literaturgeschichte* (Darmstadt: WBG, 1993) 190-198; H.-J. Klauck, *die antike Briefliteratur und das Neue Testament* (Paderborn: Schöningh, 1996) などは, 古代書簡とキリスト教書簡に関する最も基本的な文献であり, 評者や敬和大学の山田耕太氏が論文の中で度々言及してきたものであるが, 著者の文献リストには登場せず, 本文の中でも言及されないのである。古代書簡論は様々な新しい光を新約書簡に与えてきたが, その一つは, パレネーゼと書簡とは相互に相容れない文学類型であるというディペリウス以来の議論の根底を覆

し、「勧告的書簡 (parenetic letter)」という類型の書簡が存在することを明らかにしたことである（偽デメトリウス『書簡類型論』第7項；リバニオス『書簡タイプ論』第5項）。このことに基づいて、Malherbe はⅠテサロニケ書が「勧告的書簡 (parenetic letter)」であると主張しているのである（Paul and the Thessalonians, Philadelphia: Fortress, 1987, 34-46）。従って、パレネーゼと書簡の二律背反という前提の上に立っている本書は、既に過去のものになった理論的枠組みの上に立脚して議論を展開していると言える（拙稿「パウロによる新しいタイプの書簡の創造」『新約学研究』第24号，1996年，16頁を参照）。

ヤコブ書の神学思想について、著者は次の様に述べる。「このように、ヤコブ書の著者は、信仰者が、賛美・頌栄・祝福といった宗教的儀礼を大事にしている一方で、教会内の貧しい者を冷遇したり、教会員同士で相争い、憎しみ合っているという矛盾を鋭く突いている。これこそが、ヤコブ書の重要な思想的特徴なのである。著者が、神学的概念についての思弁を展開しないのは、そのような神学論議の中身よりも、神学が教会の実践とどう結びついているかを問題にする、著者の視点のゆえに他ならない」(38頁)。「このように、創造論と終末論を前後の枠としつつその中で、神の意思としての律法に従う歩みを命じるヤコブ書の中には、ユダヤ教の神学的な枠が保持されている。ユダヤ教とキリスト教の関係については何も語られていないが、著者は、両者を対立的に捉えるのではなく、むしろ、ユダヤ教と順接した形でキリスト教を理解しているように思われる。我々は、ユダヤ人キリスト教と言うと、祭儀的条項を含む律法の遵守に拘泥した『ユダヤ主義者』を考えることが多いが、ヤコブ書は、また別の形の『ユダヤ教的キリスト

教』も初期キリスト教の中に存在したことを示している」(41頁)。著者によるヤコブ書の神学思想の基本的特徴の把握は、概ね妥当なものだと、評者は考えるが、さらに進んで、初期キリスト教の中にあつたユダヤ人キリスト教の様々な潮流をより具体的に描き出し、その中にヤコブ書の思想を位置付けてみる必要があるであろう。特に、キリストの教えが律法を成就することや(マタ5: 17-20)、聞くだけでなく、行うことを勧める(マタ7: 24-27)、マタイ福音書が伝える山上の説教の神学的立場は、ヤコブ書の立場とかなり近いと思われ、トータルな比較検討が必要と思われるが、著者はマタイ福音書とヤコブ書に含まれる個々の言葉伝承の間に依存関係があるかどうかを検討することで満足している印象を受けるのである。

個々の節に関する著者の注解については、紙幅の制限のために、限られた箇所を選んで論評したい。ヤコ1: 13は、試練・誘惑が神に由来することを否定する興味深い箇所である。旧約においても(申8: 2; ヨブ36: 1-24)、新約においても(Iコリ1: 13; ヘブ11: 17-19; 12: 4-13)、神が教育的目的を持って人間に試練を与えるという考えがあるだけに、ヤコブ書のこの立場はとりわけ興味深い。著者は、初期ユダヤ教文献の中に試練が神に由来することを否定する議論があることを指摘し(ヨベル17: 16とシラ15: 11)、ヤコブ書の著者は特に、「主のせいで私は道を外れた、と言うな。彼は自分の憎むことをしないからである。彼が私を誤らせた、と言うな。彼は、罪ある人間を必要としないからだ。」というシラ15: 11の考え方を継承しているとする(72頁)。著者はあまり論じていないが、この議論の背景に存在している神議論的問題は、興味深い。この世の生活の中において、悪の存在と信

仰の試練や罪の誘惑の存在は否定することが出来ない事実である。しかし、このことが唯一の神による世界支配や摂理ということとどう調和するのかという問題が生じる。世界で生じるすべてのことがらが神の御手の中にあるのなら、試練や誘惑もまた神が与えたものであるということになるからである。しかし、神が下す試練の中に信仰を鍛錬し、鍛えるという最終的目的を見出すならば、否定的にみえる試練の中にも積極的な意義を見出すことが出来る。他方、そもそも神が試練・誘惑を与えて人間に罪を犯させたのであれば、罪の責任は神にあり、人間にはないという、罪に対する人間の責任を回避する議論を生む可能性もある。シラ書の著者やヤコブ書の著者が、反論しているのは、この後者の考え方なのである。ヤコブ書は、議論をもてあそんで、誘惑に負けて罪を犯すことの責任を神に転嫁することを拒否していると言えよう。ヤコブ書の著者によれば、罪への誘惑は人間の欲望から来るのである（ヤコ 1: 14-15 を参照）。

ヤコ 2: 14-26 は、信仰と行いによって人が義とされるというテーゼを提示する有名な箇所である。この箇所と、人は律法の行いによらず、ただイエス・キリストを信じる信仰によって義とされるという（ロマ 21-26；ガラ 2: 16-21；フィリ 3: 9）、パウロの信仰義認論との関係が当然問われる。著者は、ヤコブが批判しているのは、パウロ主義の誤解に対してであり、パウロの思想そのものではないという立場（川村輝典、佐藤研）を批判し、ヤコブはパウロの思想そのものを批判していると主張する（140-148 頁）。ここで問題になるのは、パウロが人は「律法の行い」によって義とされないと主張しているのに対して（ガラ 2: 16）、ヤコブが「律法の」という限定を付けずに、単に「行い」によっ

て義とされると主張していることである。そこから、ヤコブはパウロの信仰義認論を正しく理解していないとか、ヤコブはパウロ主義の誤解に対して攻撃を加えたのであるとされるのである。この問題について、著者は以下のように述べている。

「パウロが問題にした『律法の行い』とは、割礼のような、異邦人伝道の際に問題となる律法の祭儀的条項であった（ローマ 3: 30; 4: 9-12; ガラテヤ 5: 2-6）。そのような「律法の行い」によってではなく、ただ信仰によって人は義とされるとパウロは主張している。しかしながらヤコブ書における「行い」とは、そのような祭儀律法を指すのではない。ヤコブ書の著者が求める「行い」とは、何よりも隣人愛の実践であり（2: 8, 15-16）、神への全き服従である（1: 4; 2: 21）」（143-144 頁）。

この議論は大変奇異に見える。パウロが「律法の行い」に言及するとき、専ら祭儀律法の遵守を念頭に置いていたなどと言う見解は、パウロ研究者の間には全く見られないからである。パウロが割礼に言及するとき、割礼を受けた者＝ユダヤ人と無割礼の者＝異邦人との対比を念頭に置いていることがあるのは事実である（ロマ 2: 25-26; 3: 1, 30; 4: 9-12; ガラ 2: 7-9, 12; 6: 5）。しかし、このことからパウロが「律法の行い」と言う時に、専ら祭儀律法の実践を念頭に置いていたと結論することは出来ない。割礼がユダヤ人達にとって大切であるのは、創世記のアブラハム伝承が示しているように、割礼がアブラハムに与えられた永遠の契約のしるしであり（創 17: 11, 13）、アブラハムの子らであるユダヤ人に与えられた神の命令であったからである（創 17: 9-14）。逆に言うと、異邦人がユダヤ教に改宗して、割礼を受

けるとアブラハムに与えられた契約に与ると共に、アブラハムの子らとして律法を守る義務が生じると理解されていた。そこで、パウロは、論敵達の説得に従って、割礼を受けようとするガラテヤの信徒達に対して、「割礼を受ける者は、律法のすべてを守らなければならない」と警告するのである（ガラ 5: 3）。「律法のすべて」とは、勿論、倫理律法、祭儀律法の区別なく、律法の戒めのすべてである。

パウロが律法に言及するとき、倫理律法を含めている例は、枚挙にいとまがない。例えば、パウロはローマ書 2 章後半で、神の御心が具体的な戒め形をとった律法を与えられたことをユダヤ人が誇り、世界における「目の見えない人たちの導き手」を自認しているが、実際のところ律法を守っていないと非難し（ロマ 2: 17-24）、その例として、彼らが「盗むな」という倫理的戒めを教えながら、自らそれを破っていると言う（ロマ 2: 11；出 20: 15；申 5: 19）。パウロは、さらに、体に割礼を受けていない無割礼の民である異邦人でも、律法の倫理的要求を果すならば、霊による心の割礼を受けていることになる（ロマ 2: 25-29）。しかしながら、現実には異邦人世界も（ロマ 1: 18-32）、ユダヤ人世界も律法の要求を満たすことが出来ず（ロマ 2: 1-3: 19）、律法のわざによって人はすべて義とされることはなく、律法によって罪の自覚が生じるのである（ロマ 3: 20）。ローマ書 7 章において、パウロは律法と罪の関係を詳述するが、ここでは律法の倫理的要求と人間を罪に導く欲望との葛藤が描かれている。人間に倫理的要求をなす律法もその戒めも聖なるものであり（7: 12）、律法は本来霊的なものであるにも拘わらず（7: 14）、罪は律法の戒めを捉えて、かえって人間に違法な行動への欲求を与え、罪を犯させ、死へと導くの

である (7: 7-11)。

他方、パウロもまたヤコブと同様に (ヤコ 2: 8, 15-16)、律法の倫理的要求の根底に隣人愛の戒めを見出し、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」というレビ 19: 18 の隣人愛の戒めを律法の総括と考えるのである (ガラ 5: 13)。但し、パウロによれば、この隣人愛の戒めを守ることによって人が神の前に義とされるのではない。人はただキリストを信じる信仰によって義とされる (ガラ 2: 16)。信仰によって義とされた者は、割礼を受けたユダヤ人であるか、無割礼の異邦人であるかの区別なく、愛によって働くことに導かれる (5: 6)。霊によって導かれ、愛に生きる者のうちに、結果として隣人愛の戒めは成就するのである (5: 13-26)。

パウロが「律法の行い」に言及するとき、専ら祭儀律法の遵守を念頭に置いていたという著者の見解は、以上のような証拠に照らして妥当ではないと言える。著者はパウロのヤコ 2: 14-26 にパウロ思想の批判と理解しているのであるから、著者のパウロ理解が狂えば、論理的必然として、ヤコブの中心的主張そのものも把握も本質からずれてしまうことになる。パウロとヤコブの思想的対立の根本は、本当に、祭儀律法の遵守を念頭に置くのか、倫理律法の遵守を念頭に置くのかという違いなのだろうか？ 上に見たように、律法理解について、両者の間に大きな違いは認められない。両者の違いは、むしろ、信仰と行いの関係についての理解の違いにある。ヤコブは、マタイ福音書やガラテヤのパウロの論敵達と同様に、旧約・ユダヤ教の伝統的立場に立ち、信仰と行いを互に対立するものと考えず、両者はむしろ一体であると見ている。神を信じる者は、その信仰の具体的表現として、神に服

従し、神が与えた律法の戒めを実践するのである。つまり、神に対する信仰、神に対する信実であり、信仰者は義人である。これに対して、パウロは信仰と律法の行いを対立するものと考えた。パウロによれば、律法の行いは、神の前に義とされようとする、自己義認の試みである（ロマ 10：3）。しかし、律法の行いは人間を神の前での義に導くことなく、むしろ、罪の自覚に導く（ロマ 3：20）。人が神の前に義とされるのは、ただイエス・キリストを信じる信仰により（ロマ 3：21-26；ガラ 2：16）、神の一方的な恵みによるのである（ロマ 5：15-17；ガラ 2：21）。従って、「キリストは律法のおわりである」（ロマ 10：4）。パウロが信仰と律法の行いについてこのように再定義したことは、初期キリスト教の思想形成の歴史にとって革新的であり、このときに、キリスト教は母胎であるユダヤ教に対して、はっきりと別の宗教として自己定義したのであった。これに対して、ヤコブはユダヤ教的な救済理解との連続性の上に自らのキリスト教思想を築く、伝統的なユダヤ人キリスト教の立場を継承しているのである。

以上紙幅が許す限りで、本書の検討を行ってみた。本書の刊行を機会に、従来、日本の新約学者の間でもキリスト教史学者の間でも、論じられることの少なかったヤコブ書についての、本格的な学問的検証が重なられることを望みたい。